



ESAY
研究エッセイ

20 世紀中葉を生きる或る米国人 東アジア史家の軌跡

泉水 英計 (非文字資料研究センター 研究員)

辛亥革命から 100 年、先日の記念シンポジウムも盛況だった。その 1911 年の 11 月、中国大陸が風雲急を告げる頃、米国ペンシルバニア州で生まれたジョージ・カーという学者がいる。日本、沖縄、台湾についての著作がある東アジア史家だが、同年生まれの中華民国政府からは敵視された。この人物がわたしの関心をとらえ、この 2、3 年、関連する史資料の収集に急ぎ立てられている。なぜこの彼に惹かれるのか、紹介を兼ね、一寸立ち止まって考えてみたい。

20 代半ばの青年カーが横浜港に降り立ったのは 1935 年 6 月のことだった。東京で日本美術史研究に 2 箇年を過ごした後、台北の高校教師に転じ、1940 年夏までこの島で暮らす。帰国してコロンビア大学の博士課程に進学するが、3 セメスターを経たところで開戦、直近の台湾事情に詳しい希有な人材として軍情報機関に招かれた。その後、海軍将校に任官したカーは、コロンビアの軍政学校で台湾民事手引の編集を進める。台湾侵攻は中止となったが、彼は南京大使館付武官補として台湾に戻り、領事館再開後は副領事へと転じた。1947 年 3 月まで島に留まり、国府の台湾接收を具に目撃した数

少ない外国人となる。

帰国後は学究に復するが、その評価は容易に定められない。青春を捧げた日本美術史研究は日の目を見ずに終わっている。ゲラ刷りまで進んでいた *Japanese Art and Social Tradition* という原稿があったが、出版予定は 1941 年 12 月、版元は東京北星堂。校正が滞るうちに空襲で灰になってしまう。戦時動員で中断したコロンビアの博士課程に戻ることもなかった。

オリエンタリストを夢見た青年は、軍や政府での任務を経て、国際政治史の論客に変貌する。40 歳を前に奉職したスタンフォード大学フーパー研究所で担当したセミナーの主題は、旧日本帝国領の再編について米国の外交戦略は如何にあるべきかというものだった。このような活動の延長が、彼の主著の一つ *Okinawa: History of an Island People* (Tuttle, 1958) だ。1952 年に、在沖米軍の住民統治機構 (琉球列島米国民政府) の委託でおこなった調査が土台である。内部用の報告書 *Ryukyu: Kingdom and Province before 1945* (Pacific Science Board, 1953) は翻訳されて学校教科書 (『琉球の歴史』, 琉球列島米国民政府, 1956) に



写真 1 日本遊学中の旅行先にて、1936 年頃 (沖縄県公文書館 GHK5I01012)。

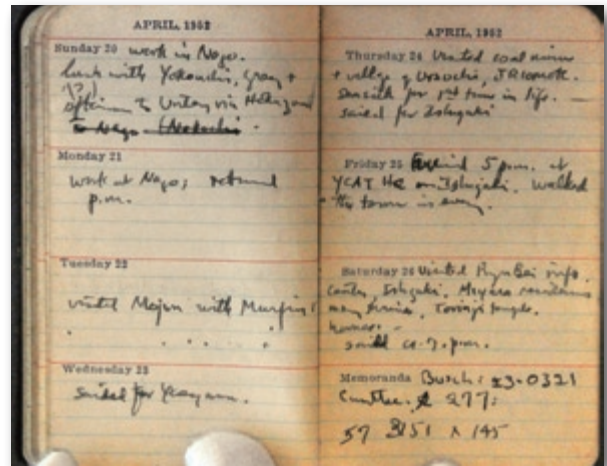


写真 2 1952 年のスケジュール帳。沖縄調査時の動きがわかる (沖縄県公文書館 GHK5H01002)。

もなった。市場版の *Okinawa* は、欧語で書かれた唯一の琉球通史として知られるが、類書が豊富な日本語読者にとっては必読書ではないようだ。潤沢な研究費を使って徹底した史料探索がおこなわれたが、沖縄研究の準備が無かったカーには事実誤認や性急な解釈が少なくない。

職歴からすれば、本領を發揮できるのはむしろ台湾史だったが、彼には禁断の島となっていた。二二八事件の渦中であって米軍の人道介入を画策した副領事カーは、むしろ軍事干渉を目的に島民を煽動したと国府から疑われる。1960年代に入って台湾史の著述を始め、いま一つの主著 *Formosa Betrayed* (Houghton Mifflin, 1965) を出版する。彼の目撃譚は、戒厳令により封印されていた二二八事件の真相を暴露するスキャンダルになった。国府に一貫して批判的なこの台湾戦後史は彼を「蒋介石の敵ナンバー2」にしてしまったという。

冷戦最盛期の米国で国府批判が歓迎されないのはわかりやすい。しかし、対中外交が急転回し人民共和国との国交が樹立されても状況は変わらなかった。大陸とは異なる島社会の個性を描くカーの台湾史は、台北であれ北京であれ統一を掲げる政府見解に対立し、いずれを支持する中国学者からも不評を買う。米国中国学会に君臨したジョン・フェアバンクは「台湾とは偶々海で隔てられただけの中国の一部である」と主張していた。40代半ばでフーバー研究所を追われた後のカーは、安定した職に就くことができない。家族もなく、孤独に困窮していく後半生だった。

Formosa Betrayed は、台湾通史の原稿から一部を切り出したものである。残余のうち日本統治時代については、東京遊学中に知り合ったエドウィン・ライシャワーの斡旋で、*Formosa: Licensed Revolution and the Home Rule Movement, 1895-1945* (University of Hawaii Press, 1974) として公刊に漕ぎ着ける。けれども、島の開闢から清朝末までを扱った原稿は、1970年代を通じて出版社の机を転々と盪回しされることになった。カーは執拗にフェアバンクの妨害を詮索しているが、完成稿のタイトル *Frontier Island: Formosan History and the Separatist Tradition* が端的に示すように反中国主義を根拠づけたものであるから、たんなる邪推ではないだろう。

とはいえ、判官鼻根に陥ってもいけない。出版査読者はカーの語学力を問題視していた。彼は日本語を話すのに問題はなかったはずだが、読み書きは不得手だったようだ。琉球通史の際には、主な文献は英訳し、識者への



写真3 “Formosa between Two Worlds,” frontispiece, *Frontier Island*, ms, 1974 (沖縄県公文書館 GHK2E04002)。

問い合わせにも翻訳者を使っている。漢籍の琉球文献を割愛したのは、時間的な制約もあっただろうが、そもそも中国語を読めなかったからだろう。

ドナルド・キーン自伝に面白いエピソードがある。1941年の春、コロンビア大学の図書館にいたキーンに声をかけ、避暑地での日本語特訓に誘ったのが上級生のカーだという。中国研究を志していたキーンはこれを機会に専攻を転じ、周知のように日本文学研究の大家となる。けれども、カーは漢字が克服できず、次第に日本語への関心を失ってしまったという。

要するに、聡明で知的活力に溢れた人だったとしても、研究業績からみるならば、東アジア史家としてのカーは決して傑出した存在ではなかった。それでも何故カーなのか。

フェアバンク、ライシャワー、キーンの名を既にあげたが、カーがその半生に接触した人物たちは注目に値する。燕京大へ向かうカーをハワイで呼び止め日本に招いたのは、近衛親米使節団の蟬山政道だった。東京では、英国大使ジョージ・サンソム卿の知遇を得る。コロンビアに進学したのは、彼を招いて新設された研究科があったからだ。海軍民事軍政局の同僚にはロックフェラー三世がいて、戦後は資金援助を含めカーを親身に扱った。ロックフェラー財団の文化部長として活躍した東京領事C・バートン・ファースも東京遊学中の知己だ。

沖縄研究の観点からは軍政学校関係者が興味深い。初期軍政府での活躍で知られるジェームス・ワトキンスやウィーラード・ハンナといった学者将校は本来、台湾作戦要員であり、カーの指揮下で台湾民事手引の編集に従



事していた。琉球列島の民事手引を編集したのは人類学者のジョージ・マードックだが、戦後になって、カーと一緒に来沖して琉球列島学術調査の企画にも加わっている。20世紀中葉の日米関係を演出した人々へと探究の窓口が自ずと開かれる。カーの軌跡を追う理由の一つである。

数の少ない日本研究者が対日戦に総動員されたことを鑑みれば、このような人脈をもったのはカーに限らないだろう。けれども、接触や社交を具体的に示す資料が誰にでもあるわけではない。書類を捨てられない性分だったというカーは領収書や履修学生の採点表まで残している。膨大な個人文書は、フーバー研究所、琉球大学図書館、沖縄県公文書館、そして台北市228纪念馆に分散して保管されているが、これらを組み合わせると、時期によっては週単位で彼と彼の周囲の人々の動きを再構成することが可能だ。

目下わたしが取り組んでいるのはこの作業である。カーの経歴を縦糸にして、彼が関係を持った人々の活動をそこに織り込む。この布地によって、米国と日本の戦争を挟んで激変する東アジア史の一面を描いてみたい。琉球大学図書館長に宛てた書簡には、不要なら破棄して構

わない私的な文書類だが、将来、沖縄占領史研究がなされる際に有用かも知れないので寄贈すると記されている。生前とくに後半生は不遇であったカーが、自己の生きた証を後世に託したとも受け取れるこの言葉が私を後押しする。

高名な米国人学者ばかりではない。カーが出会った日本の友人、台湾時代の教え子や同僚、沖縄調査の協力者などについても様々な記録が残されている。興味深い一例をあげよう。敗戦後、日本人が引き揚げた台湾で、沖縄人だけは帰郷が許されなかった。一部は難民化したか、互助組織の活躍で自活していた。その様子を伝える米国側資料として知られる報告書があるが、各地のカー文書を横断的に読み解くと、それは、在沖沖縄人指導者が戦前の台北人脈を通じて副領事カーに託したものであることが判明する。

この経緯を確認するために同僚の渡辺美季氏の紹介で川平朝清氏と会った。沖縄放送界の立役者として知られるが、旧制台北高校在学中にはカーの授業に臨席し、敗戦直後の台北で再会、カーとは終生の親交があり、*Formosa Betrayed*の共訳者でもある。さらに、川平氏の紹介で、同じく台湾生まれ沖縄人実業家の長嶺為泰氏を知る。奇妙な縁に驚いたのは、彼がポリビア帰りだったことだ。1954年春、琉球政府による計画移民の一次隊として当地に渡っている。この計画は、琉球列島米国民政府が用意した調査報告 *Okinawans in Latin America* (Pacific Science Board, 1954) に依拠したものだが、カー文書を組み合わせると、その調査案は彼がフーバー研究所で策定したものとわかった。カーによって開かれる探究の窓口がここにもある。

琉球史を通してのみカーを知っていた私は、3年前に初めて228纪念馆を訪ねたとき、台湾で知られている同一人物があまりに違うのに驚いた。向こうでは、彼は何よりもまず台北副領事であり、良くも悪くも228事件の目撃者だった。沖縄と台湾でそれぞれ一方の横顔だけを見ているのは、国境に影響される私たちの視野の問題であろう。正面から彼を見据えることで、東アジアへの米国の関与を本来の連続として理解することができる。国境内で歴史を語りがちな私たちの傾向はまた、川平氏や長嶺氏が生きた台湾と沖縄（さらにポリビア）の連続をも見えずらいものになっている。カー文書の研究が面白い理由は、このような視野の狭さを自覚させられ、それを克服する探究に自然に誘われるところにあると思う。

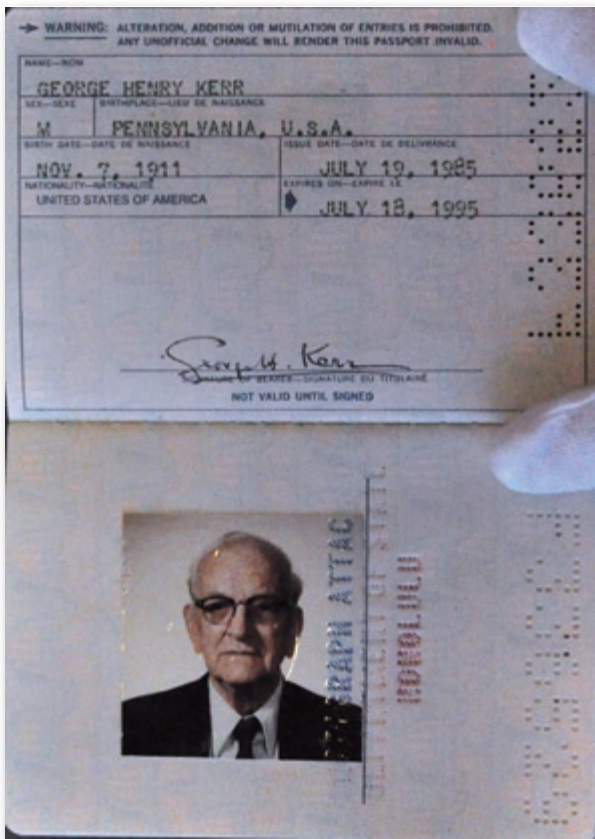


写真4 1992年8月、このパスポートの更新を待たずにカーは他界した（沖縄県公文書館 GHK5A01015）。